

福島県 中学校長会 広報

・会長挨拶「校長会の新たな役割」.....	1
・学校教育の今日的課題「学校経営を考える」...	2
・平成26年度県中学校長会の歩みと成果 ...	3
・専門部会活動の概要(行財政部会・研究部会・ 進路指導部会・生徒指導部会・広報部会)	4~6
・小・中学校合同理事会報告、中学校理事会報告 ...	6~7
・平成27年度県中学校長会主要行事予定 ...	7
・支会情報と特色ある経営(岩瀬・耶麻・双葉・いわき)...	8~11
・随想「目標を持って続けること」.....	12



平成26年度を振り返って ～ 校長会の新たな役割 ～

福島県中学校長会長 君島 勇吉
(福島市立福島第四中学校)

平成26年度6月26日～27日に開催された東北地区中研究協議会福島大会が大きな成果を収めて終了できたことを心より嬉しく思っています。特に、「ふくしまからの報告」は、参会の校長先生方に衝撃と感動を呼ぶこととなりました。同時に、校長としての責務や使命感について熟考する機会となりました。本県中学校長会の企画力や細やかな気配りは、大変好評であり、伝統的に受け継がれてきた、組織力、機動力、そして見識と格調の高さを余すことなく披瀝することができました。関係の皆様にも心より感謝申し上げます。

各専門部会の活動に新たな前進

また、本年度における各専門部会の活動を振り返りますと、新たな一歩を踏み出すことができたと考えています。

行財政部会では、県教育庁義務教育課との懇談の機会を例年より増やすとともに、その内容も県教育行政に踏み込んだ実り多いものとなりました。

研究部会では、3年間の研究成果をまとめるとともに、双葉支会の校長先生方には、本県中学校長会からの報告書第1集・第2集に続く、原発事故からの復興の歩みを記録として残していただきました。今後も、研究集録に震災・原発事故からの復興の歩みを歴史の証言として残す計画です。継続的な取組に理解と協力をお願いします。

生徒指導部会では、生徒の心のケアの現状や不登校、反社会的な問題行動の推移等を継続的に調査するとともに、情報機器の所持状況やネットトラブル等の現状について調査しました。SC、SSWの増員や配置拡充の必要性について具体的な数値として示すことができたと考えています。

進路指導部会では、進路希望調査の県内統一システムを試行しました。今後、復興の歩みの一つの象徴的存在となる「ふたば未来学園」の希望状況を把握するために大きな役割を担うことが期待されます。

広報部会では、HPの活用が多岐にわたることから、その更新について検討しました。今後、新

規更新、新たな活用等について期待されています。このように充実した活動が展開できましたことを会員の皆様に心より御礼を申し上げます。

教育改革の進行と校長会の役割

さて、平成27年4月からは、教育改革の第1弾として新教育委員会制度が開始されます。校長会としても新制度スタートにあたり、新たな対応が必要になってくることと考えています。

新制度で危惧されていることは、地方教育行政の政治的中立性と、教育施策等の継続性と安定性であります。一方では、市町村長が「総合教育会議」を主宰し、教育行政の大綱の策定や教育の条件整備、それに係わる予算の調整など、教育委員会と協議する場が設けられます。

校長会は、リーダーシップを発揮し、教頭会や養護教諭部会、事務研究部会等の各種団体と連携を強化しながら、様々な教育施策が実効性や継続性が期待できるのか、また、十分な財源や人的配置等があるのか、チェック機能を生かした積極的な対応が期待されていると考えています。

新たな人事評価システムを前に

また、次年度より新人事評価システムが試行されます。メリハリのある給与体系は、文科省や全日中もその必要性を認め、推進する方向にあります。これまで教職員の指導力や専門性の向上を協同的に支え合ってきた「同僚性」と矛盾やズレが起こらないのか危惧する声も聞かれます。大変難しい問題であると感じています。新しい人事評価システムが必要となってきた歴史的経緯、さらには他県での先行実践の成果と課題等々について、次年度から設置されます特別委員会の調査研究に期待したいと思います。学校教育という場における質の高い「同僚性」の構築のために、どのような人事評価システムが望ましいのか、本県中学校長会への期待は大きいと考えています。

最後に、会員皆様のご尽力によりまして、復興に向けた着実な一歩を踏み出すことができましたことを心より御礼申し上げますとともに、本年度をもちましてご勇退されます校長先生方のこれまでのご功績に重ねて感謝申し上げます。



学校教育の今日的課題

学校経営を考える

福島県中学校長会副会長 清野 茂徳
(伊達市立桃陵中学校)

今年度の県中学校長会の運営は、「ふくしまの復興は教育から」を原点に据え、第64回東北地区中学校長会研究協議会福島大会の成功に向け、君島会長のもと、大会実行委員を中心として県内全中学校長の力を結集して取り組みました。その結果は、周知の通り、「ふくしまからの報告」をはじめとして、熱心な研究協議会、記念講演等心の「記憶」に残る充実した大会となりました。

さらに、県内各中学校におきましては、「原発・震災後の対応」「確かな学力の定着」「いじめ・体罰の絶無」「不祥事の防止」「体力の向上」等、各校長先生方のリーダーシップのもと、教職員が丸となって取り組み、数多くの素晴らしい成果を上げられたと思います。

今年度は、第65回全日本中学校長会総会、第65回全日本中学校長会研究協議会北海道（苫小牧）大会をはじめとして各種会議等に参加させていただき、学校経営について見直すことができました。

全日本中学校長会では、平成24年度に全日中教育ビジョン「学校からの教育改革」の改訂を行い、その中でも特に「10の提言」の見直しを図り2年目を迎え、その具現化と国の動向とそれに対するかわりなどをしっかりと捉え取り組んでいます。校長が、学校が取り組むべき課題を明確にし、学校経営・運営への明確なビジョンを持ち、積極的な学校経営に取り組み、学校の自主性、自立性を確立し、一層の教育改革に取り組むのは私たち校長の責務です。

今、本県の各中学校が抱える課題は、一人一人の教員の努力だけでは、到底解決が困難であり、校長の強いリーダーシップのもと、学校組織をあげて取り組まなくてはなりません。

さらに、本県教職員の不祥事根絶に向けて一層の指導の強化を図っている中、残念なことに教職員のみならず管理職の不祥事も無くなりません。

一般に言われ続けている言葉に、「校長がかわれば学校が変わる」がありますが、この意味する

ところは二つ考えられます。まず、ひとつは、「人事異動によって、前任の校長から新しい校長に替わる場合」であり、今ひとつは、「校長その人が、意識を変える場合」です。安易に校長を替えればよいという問題ではありません。私たち校長自身の意識が変わり、より高い志をもち、自校の教育課題をしっかりと見極め、真摯に学校経営にあたることが重要です。

横浜市の学校管理職人材育成指針（H23.1）

には、管理職に求める具体的な資質能力として

(1) 情熱・人間性等

人間性、リーダーシップ（決断力・判断力）
組織リーダーとしての使命感、責任感
豊かな経験に基づく社会性、識見
教育公務員としての法令遵守

(2) 学校経営者としての専門性（経営・組織マネジメント）

学校ビジョンの構築
カリキュラムマネジメント
人材育成
環境・組織づくり、危機管理
経営資源の活用（人的・物的・資金的・情報的資源）
連携力

が記載されています。

確かに校長の人柄の良し悪しや得意分野・経歴等は、校長としての重要な要素に違いありませんが、学校を統括し管理する校長と考えたとき大事になってくるのは、上記に述べられている力をしっかりと身に付けることが大切です。未来に向け今の自校の課題をしっかりと把握し、常に改革を積極的に推進する校長でなければなりません。この姿勢こそが、先生方さらには保護者や地域の方々に伝わり、学校が変わり、これからの福島を担う生徒の育成につながると確信しています。

最後になりますが、福島県中学校長会の益々の発展を願い、各校長先生方の頑張りを期待します。

平成26年度

県中学校長会の歩みと成果



事務局長 菅野 善昌
(福島市立福島第一中学校)

東日本大震災及び原発事故からまる4年が経過しようとしています。一方、未だ再開が叶わない臨時休業中の学校や避難先の仮設校舎等による学校再開など合わせて13校は、現状にしっかりと向き合い、教育課程に創意工夫を生かした取り組みを展開しながら、豊かでたくましい生徒の育成に向けて鋭意努力しています。

ところで、今春新設されるふたば未来学園高校においては、当初の募集定員を大幅に上回る新生を迎えて開校できることは、今後の復興を実現する鍵としての人材育成への大きな一歩を踏み出したと言えます。

本県の中学校教育の当面する課題としては、学校再開、心身の健康、放射線教育、防災教育等の推進、教育委員会制度の見直しや新人事考課制度の導入等の新たな教育制度改革への対応など多岐に渡ります。そのような中、本校長会の運営については、様々な状況下にある学校の実態を踏まえ、「教育活動の正常化と当面する諸課題の解決」という基本方針の基に、「学校は復興のシンボルであり、復興の活力源である」という共通認識のもとに、各専門部会を中心に充実した活動を展開することができました。今後も、校長は学校経営の最高責任者としてのリーダーシップを発揮し、自校の教育課程の効果的な運用と教育環境の整備を図りながら「生き抜く力」を身に付けさせる学校経営に努めていかなければなりません。

各専門部会におきましては、県専門部会長・専門部幹事、各支会専門部会長の皆様を中心とした各会員のご尽力により、大変充実した活動となり、大きな成果を収めることができました。

専門部会の活動概要

(1) 行財政部会

前年度に引き続き「大震災・原発事故の影響に係る調査」を含む当面する重要課題についての調査研究を行い、集計・分析の結果を基にして県人事委員会、県議会各派及び各市町村長と市町村教育長への要望活動を実施しました。

また、小・中学校長会合同の県教育庁関係者との懇談会を開催し、学力の向上、体力の向上、心のケアと教育相談体制の充実、避難区域の学校経営の取り組みなどの課題について活発な意

見交換を行い、教育行政施策の一層の充実を依頼しました。

(2) 研究部会

全日中の研究主題に基づき、東北地区中研究協議会福島大会を開催し、第1～第3分科会において東北各県の特色ある研究実践を共有し、研究の深化を図ることができました。さらに、特別プログラム「ふくしまからの報告」を位置づけ、震災後の本県の中学校現場の現状と課題、今後の方向性等について広く発信しました。

また、全日中研究主題に基づく3年間の継続研究の成果を収めた「研究集録」を刊行し、成果を共有することができました。加えて、平成27年度からの新研究主題、小主題を踏まえ、本県の実態に応じた研究の推進に向けて「研究の手引き」を刊行しました。

(3) 進路指導部会

進路指導に関して「高等学校入学者選抜方法の改善要望に関する調査」「進路指導の現状と問題点」「卒業生の進路状況」の各調査を行い、「進路指導に関する調査集計結果」として各学校へ情報提供しました。また、県入試事務調整会議や県立高等学校長協会に対して、より望ましい選抜方法や事務手続き等について提案しました。さらに、県内全てを対象とする「進路動向調査」を試行実施し、全県的な視点から進路希望状況の把握が可能となりました。

(4) 生徒指導部会

いじめや不登校等の問題の解決に向けた「スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の活用効果を把握する調査」及び昨今問題の「インターネット利用に関する調査」を実施し、分析・考察の結果を各学校に情報提供することによって生徒指導の充実を図りました。

また、「いじめ防止対策推進法」の施行を受け、各校長のリーダーシップのもとに校内体制の再構築などいじめの未然防止や改善・解決に向けた取り組みを展開しました。

(5) 広報部会

中学校長会ホームページの管理・運営とともに、広報誌を年2回発行し、ホームページへの掲載等も通しながら、本会の組織・運営、事業内容、活動状況等について、広く情報を発信しました。

専門部会活動の概要

● 行財政部会 ●

県小中学校長会の活動方針を踏まえ、激しい変化にも対応しつつ、教育行財政上の課題解決に向けて組織的な対策活動に取り組んだ。

調査内容については、吟味した上で加除修正・整理統合し全体的な見直しをした。特別調査は、震災後3年以上経過したものの、復興への道のりが未だ深刻な状況であることから、継続実施した。

1 活動の重点

当面する重要課題の調査研究と課題解決
教育諸条件の整備充実

2 調査研究活動

- (1) 調査 : 教職員配置等に関する調査
- (2) 調査 : 教育施策の実施状況調査
- (3) 特別調査 : 大震災・原発事故の影響に係る調査

以上の調査結果を分析し、課題を明確にして要望内容の資料とした。

3 要望活動

小中の会田会長、君島会長を中心とする要望団を結成し、8月に要望活動を行った。その際、震災加配やSC及びSSWの拡大配置の必要性等について理解を深めていただいたとともに放射線教育の継続的取組等の依頼があった。

(1) 面談 (要望内容説明)

福島県人事委員会
県議会議員政党等

(2) 要望書届け

福島県市長会、町村長会
福島県町村議会議長会、市議会議長会
市町村教育委員会、都市教育長会、町村教育長会の代表機関等

(3) 主な要望事項

教職員の加配について
SC及びSSWの拡大配置について
学級編制基準や教職員定数改善について
人材確保のための処遇改善について 等

4 教育懇談等

関係機関と懇談を行い、現状説明等を行った。

- (1) 福島県公立学校退職校長会 (7月)
- (2) 福島県教育庁関係者 (8月)

(行財政部会長 小山 金也)

● 研究部会 ●

1 各支会、各学校の実情に応じた研究の推進

研究主題『未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育』を指標とした8小主題について、支会ごと特色ある研究実践を推進し、第3年次研究の深化に努めてきた。

2 「研究集録」・「研究の手引き」の刊行

3年間の継続研究の成果を収めた「研究集録」を刊行し、その成果を全会員で共有することができた。さらに平成27年度からの新研究主題、小主題を踏まえ、福島県の実態に即した研究推進となるよう、「研究の手引き」を刊行することができた。

3 全日中、東北地区中との密接な連携

全日中研究協議会北海道大会に参加し、研究題にかかわる研究の方向性や他県の研究の動向等の情報収集に当たった。また、東北地区中福島大会では、第2分科会(健康・安全教育)において、岩瀬支会が研究内容とその成果について発表し、地域に根ざした健康教育の充実に向けて有意義な研究協議が行われた。

4 「震災体験が切り拓いていく教育」の発信

報告書第2集“凜と生きる”を全国に配布するとともに、その内容については、東北地区中福島大会においても、『ふくしまからの報告』の中で発表した。教育復興に向けた校長の苦悩と決断、中学校長会が果たしてきた責務等について示し、その内容はDVDとしても配布するなどして、県内はもとより、「震災体験が切り拓いていく教育」を広く東北や全国に発信することができた。また今年度より研究集録の中に、「ふくしまの今～双葉支会の現状～」を掲載した。今後、記録として積み重ねていく中で、県内の全会員で双葉支会の現状とその抱える課題等について共有していきたい。

(研究部会長 佐藤 和彦)

● 進路指導部会 ●

本部会では、「1 「生きる力」をはぐくむ進路指導の積極的な推進」、「2 高等学校入学者選抜方法の改善に向けた高等学校や関係機関との連携」、「3 適正な進路指導充実のための諸調査の実施と資料提供」の方針のもと活動してきた。

本年度も、昨年度に引き続き、県立高等学校長協会（高校入試検討委員会）、私立高等学校協会との連携を深めながら、調査書の記載内容の統一について共通理解と周知徹底を図った。

1 「生きる力」を育む進路指導の積極的な推進

各支会においては、進路指導に関する情報や情報提供を積極的に行うとともに、部会長会においても、情報交換・協議を通して進路指導体制や指導内容の改善・充実の方向性を探った。

2 高等学校入学者選抜方法改善への対応と連携

進路に関する調査の集計結果をもとに、県立高等学校入学者選抜事務調整会議においても、望ましい選抜方法や事務手続きについて、改善事項について具体的な意見交換を行った。

特に、昨年度から実施された、合格者一覧の電子メールによる交付についての改善意見が多く取り上げられた。

また、中学校の要望どおり、高校入試が月曜日実施となったことについて、その意図と経緯を再確認することができた。

3 「中学生活と進路」＜福島県版＞の編集

副読本「中学生活と進路」の部分改訂にあたり、全国版と県版の内容の整合性を図るとともに、生徒の実態や生徒を取り巻く情報環境の変化に応じた内容になるよう検討を加えた。また、写真やイラスト、図版、統計資料等を最新のものとするなど、学習活動に役立つ資料に差し替えを行った。

通信制の諸学校を、資料のページでどう取り扱うかについては、審議を継続することとした。

4 県下一円の進路希望調査の実施

進路希望調査を全県下一斉に実施する取り組みを試行実施した。その反省を生かして、次年度は正式に実施することとした。

(進路指導部会長 大橋 誠寿)

● 生徒指導部会 ●

本部会では、規範意識を高める指導、震災・原発等にかかわる生徒指導上の課題への的確な対応、小学校との連携、生徒手帳の刊行の4つの活動方針を立て、活動を推進してきた。

これまでの生徒指導上の諸問題に関する調査に改良を加えて調査を行い、各学校の取組に生かすことができるよう資料の提供を行った。

主な活動の概要は、以下のとおりである。

1 高い規範意識と望ましい人間関係を基盤とした学習集団づくり

今年度は被災4年目に当たることから、配慮を要する生徒が急増するのではないかと懸念され、各学校において心のケアに努めた結果、成果が見られた。

今後とも、心のケアについて一層配慮した対応を行っていく必要がある。

2 震災・原発等にかかわる課題、不登校やいじめ、反社会的問題行動等当面する諸課題の解決や未然防止

これまで実施してきた調査の他に、今年度は「インターネット利用に関する調査」を加えて調査を行った。これまで実施してきた調査では、教育相談体制について人員配置や勤務時間等の増加を教育委員会へ一層働きかける必要があることが分かった。また、反社会的行動や不登校の発生と避難等をした生徒との因果関係は、昨年度に引き続き見られなかった。

今年度新たに加えた「インターネット利用に関する調査」からは、学校又は地域ごとに保護者も巻き込んだ啓発活動や研修会も含め、情報モラル教育の一層の推進が必要であることが分かった。

3 小学校等との連携

中学校区内の小学校、地域等との連携がさらに進められ、発達段階に即した一貫性のある基本的な生活習慣づくりに効果をあげているところが増えている。また、広域的な補導等において、高等学校と連携を図るなど新たな連携体制が進んだ。

4 生徒手帳の編集、刊行

予定通りに生徒手帳を編集し、刊行することができた。

(生徒指導部会長 齋藤 良一)

● 広報部会 ●

今年度も7月と3月に広報誌「福島県中学校長会広報」を発行し、本会や支会の活動紹介及び、関係団体等の活動概要の報告を行った。この広報誌については、平成25年度よりホームページ上での掲載となり、本年度に至っている。

ホームページの更新・維持・管理を行い、今後について検討をし、次年度も現状踏襲となる。

【会報の主な編集内容】

1 第152号（7月1日発行）

会長あいさつ（君島勇吉会長）

平成26年度県中学校長会総会の概要及び組織
学校教育の今日的課題「今、求められるもの」

（小澤章雄副会長）

県中学校長会の活動と運営

（菅野善昌事務局長）

各専門部会活動の概要（各専門部会長）

全日本中学校長会総会の概要

支会情報と特色ある経営

福島・石川・南会津

東北地区中福島大会御礼

（雉子波敏司実行委員長）

新会員紹介・新会員の声

随想「『体育人』この三文字の重み」

（川島宏副会長）

2 第153号（3月1日発行）

平成26年度を振り返って（君島勇吉会長）

学校教育の今日的課題「学校経営を考える」

（清野茂徳副会長）

県中学校長会の歩みと成果

（菅野善昌事務局長）

各専門部会活動の概要（各専門部会長）

県小・中合同理事会報告、県中学校理事会報告

平成27年度主要行事予定【県、東北・全日中】

支会情報と特色ある経営

岩瀬・耶麻・双葉・いわき

随想「目標を持って続けること」

（滝田文夫副会長）

（広報部会長 林 尚）

● 小・中学校合同理事会報告 ●

本年度最後の小・中学校合同理事会が2月18日（水）、19日（木）の2日間にわたり、あづま荘で開催されました。平成26年度を総括する報告、27年度に向けての計画が審議されましたので、概要を報告いたします。

会田智康小学校長会長より、管理職の不祥事は絶対にあってはならないことであり、全会員厳しく自己を律し、一丸となって不祥事防止に万全を期すよう話がありました。また、1年間の諸課題への取組みや運営に関する会員各位の尽力に対して感謝とねぎらいの言葉がありました。特に、1年間の活動の成果として県教委との連携が図られたことをあげ、今後も研修を深めながら、意見要望を練り上げ、子供たちの未来のために、校長会としても全力で取り組んで欲しいという願いが会員に託されました。

【報告】

- 1 平成26年度退職役員感謝状贈呈式について
- 2 小学校長会・中学校長会の合意事項について

【協議】

- 1 平成27年度県小・中学校長会合同開会式及び理事会、総会の運営について

期日：平成27年4月22日（水）

会場：福島県教育会館

- 2 平成27年度主要行事について
次年度の校長会行事予定案について事務局提案のとおり了承された。

- 3 平成27年度教職員人事の反省について

各小・中学校長は、3月25日までに各支会行財政部（会）長に提出する。

各支会小学校行財政部長は、4月16日までに各支会中学校行財政部会長に提出し、小・中合議の上、5月7日まで、180部印刷し、県中学校長会事務局に提出する。

- 4 平成27年度行財政部（会）の調査について

平成27年度も震災後の様々な環境下における県内の現状を鑑み、継続して特別調査を実施する。調査は、27年度は実施しない。

退職役員は、会田、君島両会長を含め小学校26名、中学校20名です。多大の功績をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

● 中学校理事会報告 ●

本年度を締めくくる第5回中学校理事会は、去る2月18日(水)～19日(木)に開催されました。初めに君島勇吉会長より、福島県の復興に向けた取り組みや課題解決に向けた御苦労に感謝とねぎらいのことばがありました。特に本年度は、東北地区中福島大会の運営や、「ふくしまを生きる」第2集の配布、諸調査や関係機関との連携強化など多大の成果を上げることができたことに重ねて感謝のことばがありました。次年度も人事評価制度の施行や教育委員会制度の見直しなど、校長会として取り組まなければならない新たな課題も多くあります。今年度末で、私を含め20名の役員が退職しますが、事務引継ぎをしっかりと、後輩に託したいとのことでした。

その後、下記について報告・協議がなされました。

【報告】

- 1 全日中理事会報告
- 2 平成26年度会務・会議報告について
- 3 県中学校長会共催、後援承認行事(事業)について

【協議】

- 1 平成26年度会務・事業報告について
- 2 平成26年度会計執行状況について
- 3 平成26年度関係団体との連携について
- 4 平成27年度事業計画(案)について
- 5 平成27年度中学校長会行事予定(案)について
- 6 平成27年度会計予算(案)について
- 7 平成27年度第1回理事会の運営について
- 8 平成27年度第65回総会の運営について
上記の件について、事務局提案の通り了承されました。

【連絡】

- 1 平成27年度全日中(福岡)大会・東北(青森)大会への参加割り当てについて
- 2 平成26年度古岡奨学生の内定について
- 3 平成27年度当初の関係書類提出について
- 4 平成27年度の会費納入について
次年度は中学校が小・中学校長会の運営当番になります。ご協力のほどよろしくお願い致します。

平成27年度中学校長会主要行事予定

[県、東北地区、全日中関係]

月	日	県関係	東北地区中・全日中関係
4	9 22	合同事務局会 第65回総会・理事会	
5	14 19 20 27 28	行財政部合同部会長会 合同事務局会 研究部会長会	全日中理事会 全日中総会(～21)
6	3 9 10 25 25	合同理事会(～4) 生徒指導部会長会 進路指導部会長会	東北地区中副会長会・理事会 東北地区中青森大会(～26)
7	15 23 24 28	行財政合同代表部会長会 合同事務局会 ・広報第154号発行	全日中理事会 全日中役員研修会
8	19	合同理事会	
9		要望活動	
10	22 28 28 29	進路指導部会長会	東北地区中臨時副会長会 全日中理事会 第66回全日中九州(福岡)大会(～30)
11	10 17 19	研究部会長会 合同事務局会 生徒指導合同部会長会	
12	1	合同理事会	
1	19 22 25 27	研究部代表部会長会 進路指導代表部会長会 生徒指導代表部会長会	全日中理事会
2	3 4 5 19 25	行財政合同部会長会 合同事務局会 合同理事会	東北地区中副会長会・理事会・ 監査会・事務局会(青森市) 全日中事務担当者会(～26)
3	15	・広報155号発行 会計監査	

● 平成27年度東北地区中学校長会の概要 ●

- 1 大会主題
『社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育』
- 2 期 日
平成27年6月25日(木)・26日(金)
第1日目:「開会式」、「全日中からの報告」
第2日目:「分科会」、「記念講演」、「閉会式」
- 3 会 場
青森県青森市(ホテル青森)
- 4 記念講演
講師:株式会社西田酒造店
代表取締役社長 西田 司 氏
演題:「株式会社西田酒造店の経営戦略」

支会情報と特色ある経営

岩瀬

岩瀬支会の活動



岩瀬支会長 渡部 修一
(須賀川市立第一中学校)

岩瀬支会（須賀川市、鏡石町、天栄村）の中学校13校においては、地域や保護者の皆様のご支援をいただきながら、平成26年度の教育活動を順調に進めることができました。

いまだ放射線問題は完全には解決せず、給食の食材検査や校庭の放射線量測定などは継続して毎日実施されています。しかし私たちは、生徒の数が減少することなく、毎日の教育活動がきちんと計画通りに実施できること、その当たり前のごことに感謝して、校長が先頭に立って日々の教育活動に取り組んでおります。

本支会では、東日本大震災を教訓に、地震や風水害等の災害発生時の生徒の安全確保（具体的な避難方法や保護者との連絡方法等）について、全ての学校で危機管理マニュアルの見直しを図りました。多方面からのご意見をいただき、実情に応じてさらに改善していく計画です。

今年度、岩瀬支会においては定例の校長会を5回、研修会を2回実施し、地区内の諸課題解決と小・中の連携、危機管理機能の向上など校長としての力量向上を図ってきました。また、岩瀬地区中・高連絡協議会を年2回実施して、地区内高校6校との連携も進めています。

研究部会においては、平成24年度から継続研究を進めてきた健康・安全教育の実践について、6月の東北地区中学校長会研究協議会福島大会で成果の発表を行うことができました。

さらにはそれぞれの教育委員会の指導のもと、須賀川市では全ての中学校区を単位に小中一貫教育の研究を、鏡石町では全小中学校で土曜授業を、天栄村においては県の「つなぐ教育」推進事業を小中学校で実施するなど、家庭・地域との連携のもと、児童・生徒の学力向上に努めてきました。次年度はこれらの実践研究をさらに深めていかなければならないと考えているところです。

《学校紹介》

伝統行事「松明あかし」とともに

須賀川市立第三中学校

本校は、今年創立60周年を迎えます。創立以来、地域とともに歩み、地域に根ざした教育活動を展開しています。

隣接する須賀川牡丹園は本校生の誇りであり、園の清掃活動や牡丹写生会を続けています。平成4年からは、学区内の五老山で繰り広げられる伝統行事「松明あかし」に参加しています。市内の中学校で最も早く松明製作や松明運搬を教育課程に位置づけ、授業や学校行事の一環として「松明あかし」に取り組み、今年度で23回目の参加となりました。

当時の文部省から教育課程（選択教科）の調査研究校に指定され、3年選択技術の学習内容として取り上げたことが始まりです。平成13年度からは、総合的な学習の時間の郷土理解・地域学習として組織的・継続的に取り組んできました。3年生が中心となり、自分たちの手で長さ8m30cm、直径1m20cm、約1トンの重量がある松明を製作し、校庭での運搬練習を経て、本番を迎えます。1トンもの松明を担ぎ、起伏のある2kmの道のりを約1時間かけて丘の上に運んでいくのは、容易なことではなく、危険も伴います。それだけに、担ぎ手となる80名の生徒の一糸乱れぬ呼吸と体力や気力が必要となります。肩にかかる重さは伝統の重みであり、誰一人弱音を吐きません。運びきった後の達成感と高揚感は、格別なものとなります。



燃え盛る松明の前での応援合戦で、さらに一体感が増し、鎮魂と復興への強い思いが湧き上がります。やり遂げた自信や爽快感は、生徒を一段と逞しく成長させ、伝統は後輩たちに受け継がれていくのです。

(校長 森合 義衛)

耶 麻

耶麻支会の活動



耶麻支会長 長谷川良三
(喜多方市立第一中学校)

耶麻支会は喜多方市、西会津町、北塩原村の3市町村計10校で組織されています。他支会同様耶麻支会も

急激な生徒数の減によりいろいろな面で活動に支障が出てきています。それでも中教研では、隣接する両沼支会との教科による合同開催、中体連の各種大会では他校との合同チームでの参加等、さまざまな工夫しながら活気を失うことのないよう努力してきました。

普段耶麻支会では管内の小学校20校で組織する耶麻地区小学校長会と連携し、『耶麻地区小中学校長会連絡協議会』を組織して一緒に活動しています。今年度は『連携を深めながら、お互いのよさを学びあい切磋琢磨する耶麻校長会』のローガンのもと研修テーマの「学校力、教師力を高める工夫」について以下の3つの視点から年間4回の研修に取り組んできました。

- (1) 職員組織の活性化と実践意欲の向上
- (2) 学力向上と小・中連携の強化
- (3) ミドルリーダーの育成

特に第2回研修会ではマナビックビジネス代表取締役の真部正美氏を講師に迎え「組織活性化と人材育成」の演題で講話をいただき、「人を育てること」「組織を活かすこと」「マネジメントの重要性」について研修を深めることができ大変充実した活動が出来たと思います。

また、中学校独自の活動としては耶麻地区内の5校の高等学校と年間2回の連絡会を開催し、学力向上や生徒指導の充実について協議・情報交換を行い学校経営に活かしています。

本支会は平成29年度の東北地区中学校長会研究協議会で第1分科会『教育課程』についての発表を担当することになっています。現在、3年後の発表を目的に支会10校から『特色ある教育活動』についての情報収集を行い研究構想の構築に着手したところです。

《学校紹介》

「36人 力を合わせてオールを漕ぐ」

喜多方市立高郷中学校

平成7年のふくしま国体では、荻野漕艇場においてボート競技が行われました。また、喜多方市は「ボートのまち宣言」をし、毎年8月に「喜多方シティレガッタ」を開催しています。

その荻野漕艇場のそばにある喜多方市立高郷中学校では、7月に「ボート教室」を行います。学校にはボートの専門の指導者がいないので、地域の指導者の方や地区の公民館の方の力を借りながら行います。以前は全国大会等にも参加していたのですが、全校生徒が36人と減っているため、現在は、大会はシティレガッタにのみ参加しています。

さて、1年生はボートを漕いだ経験はほとんどないので、マナーやオールを持ち方、漕ぎ方などを一から学びます。しかし、3年生ともなると準備から後片付けまで自分たちで行うことができるようになります。

また、ボートは、コックスと呼ばれる者の「キャッチ・ロー」のかけ声のもと、力を合わせて漕ぎます。左右のバランスが合わないとうや左へ。おまけにオールを水から抜き損ねると、「腹切り」といって身動きが取れなくなります。4人の力を合わせる事が大事なのですが、力の強い者が一人いるより、4人の力が平均していたほうがいいとも教わりました。

1年生から3年生まで同じボートに乗り、「キャッチ・ロー」の声に合わせて漕いでいるうちに少しずつ息も合ってきます。1年生も漕ぐ技術も上がり、ボートはグングン前に進むようになります。漕ぎ終わった時のかけ声は「ありがとう」。生徒たちの表情には、みんなで力を合わせた清々しさが残ります。

真夏の暑い日差しの中、ボート教室やシティレガッタでは、教職員もオールを漕ぎます。地域の中に学校がとけこむ時です。



(校長 長谷川浩文)

双葉

「ふるさと創造学」スタート



双葉支会長 吉田 隆見
(富岡町立富岡第一中学校)

双葉支会は、双葉郡内の8町村、全11中学校で成り立っています。東日本大震災とその後の原発事故から4年が経とうとしている現在でも、再開を果たしているのは9校。うち7校は、避難先での教育活動を続けています。残りの2校は、再開の目処すら立っていません。

多くの学校は、入学者の減少により学校の存続さえ危ぶまれる状況の中で、少人数のよさを最大限に生かした教育活動を工夫し、教職員が一致協力して指導に当たっています。

そのような中で今年度、双葉郡内の各小中学校は「ふるさと創造学」をスタートさせました。

この学習は、自分たちのふるさとへの理解を深めるとともに、生徒自身やふるさとの人々が、よりよく生活できるようにするための課題、ふるさとの復興、再生のための課題を自らが見つけ、情報を収集・整理、分析・考察できるようにするなど、探求的、問題解決的な学習の方法を身につけさせながら、ふるさとの復興・再生に役立つことのできる人材の育成を目指す学習です。

開校している川内村の小学校や郡山ビッグパレットを会場に、双葉郡内の小中学生、教職員が参集し、学習の成果を発表し合う機会を持ったり、双葉郡復興ビジョン推進協議会主催による、教職員研修を重ねたりしてきました。

さらに、平成27年度より広野町に開校する福島県立ふたば未来学園高校とも、総合的な学習の時間に行うこの学習で連携していきます。

現在でも避難生活が続く子どもたちに、どのような教育をすることが双葉郡内中学校としての努めなのか、郡内教育長会や関係機関と力を合わせ、進めていきたいと考えています。

《学校紹介》

双葉町の幼稚園、小・中学校再開

双葉町立双葉中学校

震災から3年後の平成26年4月、いわき市錦町にある民間銀行の店舗を借用して、双葉町立幼稚園・小学校・中学校が再開されました。中学校は、生徒数が1年生3名、2年生2名、3年生1名の計6名で、店舗2階フロアをパネル等で仕切り教室として使用しました。校庭や体育館、特別教室がない環境でも、生徒が「双葉の学校に来てよかった。」と思えるように、町教育委員会とともに以下の方針で教育活動を進めました。

個に応じた指導や支援を充実させます

ICT機器を導入し、授業を充実させます

英語教育を充実させます

体験活動を充実させます

子ども同士、子どもと教師のかかわりを大切にします

教育相談等、保護者との連携を大切にします

さらに、少人数だからできないと諦めるのではなく、通常の学校と同じように部活動や生徒会活動も実施しました。再開して間もないため、出場は無理かと思われた5月の中体連陸上競技地区大会にも、教職員の熱意と町教育委員会の協力により、3名の生徒を参加させることができました。そこで、生徒が一生懸命走ったり、跳躍したりする姿を見た時には、感極まる思いで一杯でした。

8月、私立幼稚園跡地に待望の仮設校舎が完成し、音楽室や理科室等の特別教室、そして体育館も備わりました。新しい環境の中、11月には幼小中合同の学習発表会も実施し、1学期よりも充実した学校生活を送っています。しかし、まだ多くの課題も抱えています。今後も、「可能性の追求」を合言葉として、学校経営の充実を図っていききたいと思います。



(校長 伏見 康弘)

いわき

いわき支会の活動



いわき支会長 小澤 章雄
(いわき市立平第一中学校)

いわき支会は、田人地区の3校が1校に統合となり、42校41名の会員(1校は小中兼務校の校長で小学校籍)によって組織されています。

内、6名は他管内出身の校長先生方であり、全国的な視野に立って新鮮な感覚で学校運営に当たるとともに、積極的に校長会の運営に参画しております。

また、来年度は、三和地区の統廃合により3校が減少することになります。

いわき市中学校長会の活動としては、例年通りの事業計画のもとで活動しました。その中で主なものを紹介します。

1 いわき支会は、中核市であるいわき市1市だけで構成されています。そのため研修権が市にある利点を生かして、校長研修・教頭研修の機会を活用して自らの専門性を高めたり、人材の育成に努めるなど、組織的・機動的に活動しています。

特に広域化・潜在化が著しく、そして我々の予想を超えて広がる生徒指導の問題など、校長会として共通理解・共通実践が必要な事案に対しては、情報交換の場を設置しています。校長ひとりで悩むことなく情報を共有化し、リーダーシップを発揮しながら組織的に対応するため、特に校長自らが生徒の交友関係を把握し、危機感をもって情報を交換し合うとともに、警察や児童相談所、家庭教育相談員等関係機関との連携の実際について話し合い、早期発見・早期対応を期しています。

2 市内在住の小中高等学校の退職校長会と現職の小中学校長の教育懇談会を開催し、行財政面や生徒指導面などで意見交換を行いました。

また、相双地区の学校から多くの区域外就学の生徒を迎え入れております。相双地区の学校とも連携を図りながら、生徒の傷ついた心のケアのため、一人一人に応じた丁寧な対応に努めているところです。

《学校紹介》

これまでも…これからも「つなぐ」教育

いわき市立湯本第一中学校
いわき市立湯本第三中学校

今年度、「学力向上のための『つなぐ教育』推進事業」の実践を進めてきた湯本一中学区(湯本一小、長倉小)、湯本三中学区(湯本二小)は、いわき市の常磐方部にある隣接学区です。方部では、これまでも小中連携や学校と家庭の連携に関する取組を行っており、子どもたちにいわゆる「早寝・早起き・朝ごはん」の習慣が身についているなどの成果が見られます。一方で、学習習慣の確立などについての課題もあります。

事業の指定を受けた両学区では、これまでの取組を踏まえ、共同で「9年間の学びのプラン」を作成し、方部内の湯本二中学区、磐崎中学区の協力も得て、常磐方部全児童生徒の家庭や地域の事業所等に配付し、学校と家庭・地域との連携の啓発を図ってきました。さらに、両学区の小中学校どうし、中学校どうしが連携して「学びの手引き(10か条)」を作成、子どもたちに配付し学習の仕方などの指針としました。また、各学区では実態に応じて、地域の企業代表などを講師とする講演会、小・中学校共同での授業研究、中学校教員による小学校での授業、中学生と小学生との算数・数学交流学習会、TV会議システムを活用した授業研究などの実践を行いました。これらは、決して新たな取組ではなく、これまで積み重ねてきたことを、「つなぐ」という視点から見直し実践したことです。

「夢を叶えるために勉強は大切だと思った。」「母校を誇れるように悔いのない生活をしようと思った。」「私も地域を愛し、地域に愛される人になりたい。」講演会後の児童生徒の感想の一部です。子どもたちのこうした思いを、自ら未来を切り拓く力につながるができるように、これからも「つなぐ」をキーワードとして、学校どうし、学校と家庭・地域が連携し、学習習慣・生活習慣の確立と学力向上に向けた実践を進めていきたいと思ひます。

(校長 永山 誠一
鯨岡 寛泰)



小・中交流学習会



9年間の学びのプラン

福島県の児童生徒の肥満率は、全国にくらべて高いといわれている。震災の影響で運動が十分にできないことがその一因とも考えられる。

実は、私自身も隠れ肥満であった。数年前まで健康診断の結果は必ず要再検であった。総コレステロール値が標準値をはるかに超えた値であり、再検査に行くと「このままでは危ないですね。運動と食事に気をつけてください」と毎年のように指導を受けていた。

当時は、医師から助言を受けていたにもかかわらず、昼食は大盛り、夕食は毎晩10時過ぎであり、食後に風呂に入ると後は眠るだけの生活が続いていた。さらに、飲み会の締めはラーメン。また、運動といってもたまに1～2kmぐらい走る程度であり、長続きしなかった。しかし、ついに医師から「薬を飲んでみましょう。体重も必ず減らしてください」といわれ、薬に頼らなければならない状態になってしまった。

そこで一念発起。とりあえず、食事の量を減らすことと運動をすることにした。『朝食は食パン1枚とし、おかずをしっかり食べる。そして早めの夕食。締めのラーメンは禁止。必ず週1回はランニングをする。』今度こそしっかり守ることを心に強く誓ったのであった。

同じ頃、仲間内の飲み会があった折に、身体の話になった。「実は、私もコレステロール値が…」同じような人が何人もいたのだ。飲み会は健康の話でおおいに盛り上がり、健康のためランニングをしているという人も多かった。そのうち、誰かが「ただ走っていても長続きしないだろうから、どうせ走るのだったらみんな何か大会に出場しましょう。目的があるとモチベーションが高まるでしょうから」とのことで、その日のうちに20代から50代までの部員8名の陸上部ができあがった。

練習は、各自自主練習であるが、半年後の郡山シティーマラソンをデビュー戦とすることになった。目標も決まり、練習をしなればとの思いは強くなったが、片道1時間の通勤であったため平日は走ることができず、相変わらず不規則な練習であった。そんな時、ある友達と話をしているとランニングの話題になり、次のような提案があった。「ランニングのメッカの皇居へ行って走りましょう。あそこはたくさんの人が走っていて、モチベーションも高まりますよ。それに1周5km

で結構アップダウンもあるし、練習にはもってこいですよ」と。早速、ある金曜日の夜、友人4人で職場から東京へ向かい、翌朝ランニングウェアに身を包み皇居へ向かった。すでに数多くの人が走っており、ランニングのために貸し切りバスから降りてくる一団も見られた。早速多くの人に混じって走りはじめた。ゆっくりではあったが、皇居の周りを3周走ってホテルでシャワーを浴び、遅い朝食を食べて自宅に戻った。「走るた

めだけにわざわざ東京へ行ったの？」と皮肉混じりにいわれたが、15km完走したことは大きな自信となってその後の練習に身が入り、無事シティーマラソンの10マイル(約16km)を完走できた。その年は、さらにハーフマラソンにも2回出場した。それ以降、ランニングを続けている。また、職場は違っても陸上部も続いており、いろいろな大会に仲間と一緒に出場している。

大会出場という具体目標を決めて、食事のコントロールや運動を継続的にした結果、体重もコレステロール値もぐっと減り、ランニングが趣味の一つとなった。

日頃から生徒には、『目標を持ち、それに向かって努力を続けること』の大切さを説いていたが、このことは自分自身に言い聞かせるべきことであった。

随想



郡山支会長
滝田 文夫
(郡山市立郡山第一中学校長)

目標を持って続けること